

吾起瀛風邊風以奔波溺惱火折尊歸來具遵神教至乃兄鈞之日弟居濱而嘯之時迅風忽起兄則溺苦無由可生

〔日本書紀神武〕戊午年六月丁巳越狹野到熊野神邑且登天磐盾仍引軍漸進海中卒遇暴風皇舟漂蕩

〔竹取物語〕大友の御ゆきの大納言は、略中遠くて筑紫のかたの海に漕出たまひぬいかゞまけむはやき風吹て世界くらがりて船を吹もてありくいづれのかたともまらず舟を海中にまかり入ぬべく吹まはして波は船に打かけつ、まき入神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに、中略かち取答て申神ならねば何わざをかつかふまつらむ風吹波はげしけれども神さへいたゞきにおちかゝるやうなるは辰を殺さんと求め給ひ候へばかくある也はやても龍のふかするなりはや神にいのり給へといふ

〔源氏物語野分〕野分例のとしよりもおどろくしく空の色かはりてふきいづ花どものまほるゝをいとさしも思ひしまぬ人だにあなわりなと思さはがるゝをまして草むらの露の玉のをみだるゝまゝに御こゝろまどひもまぬべくおぼしたりおほふばかりの袖はあきの空にしもこそほしげなりけれくれ行まゝに物も見えず吹まよはしていとむくつければみかうしなど参りぬるにうしろめたくいみじと花の上を覺し歎く略中人々まいでいといかめしう吹ぬべき風には侍りうしとらの方より吹侍ればこのおまへはのどけき也むまばのおとゞみなみのつり殿などはあやうげになんとてとかくことをこなひのゝしる中將はいづこより物まつるぞ三條の宮に侍りつるを風いたく吹ぬべしと人々の申つればおぼつかなさになん参りて侍つるかしこにはまして心ぼそくかせの音をも今はかへりてわかきこのやうにをち給めればこゝろぐるしきにまかで侍なんと申給へばげにはやまかで給ねおいてもていきてまた